



## 2017.11.17 News 現地報告「ネパールの日本語学校」

ネパールは親日国。子供のころ、外国というのは、日本とアメリカだけと思っていた、とネパールの知人はいう。それしか知らなかったらしい。文化圏はインド。いま中国人、韓国人の進出が盛ん。英のインド統治の影響か、いまも英語は小学校から教える。2008年共和制に移行。

活気あふれるカトマンドウ市内—震災の影響は感じない



初期の政治的混乱を越えて、経済建設が進む。海外への出稼ぎも多い。若い人は、自国の3Kは他国に任せ、他国へ出かけて3Kでも稼ぐ。現在1,500人/日が外国へ渡航する。出かける先は、主として米・加・豪の英語圏。最近、日本への語学校留学が急増した。ネパールでは英語学校も多いが、日本語学校が急増。日本の日本語学校に留学する資格を得れば、アルバイトで稼ぐことができる。週28時間の制約があるが、遵守されていない。

カトマンドウ、ポカラなど主要都市で見られる数々の外国語学校



日本では、数年のネパールからの留学生急増とアルバイト主体の留学実態が問題視されている。ネパールから日本へ語学留学するには、ある程度の日本語をマスターするか、ネパールの日本語学校で150時間の履修証明が必要になる。さらに、日本で受け入れる先の日本語学校へ80万円~100万円の授業料の先払い証明が必要。ネパールの日本語学校の授業料は5~6万円。併せて莫大な借金が必要になる。GDPは一人あたり10万円。

英語圏諸国も留学生の受け入れ制度がある。ビザ発給の条件は英語力テストの合格。日本の場合の受け入れ基準は、現地日本語学校の受講証明が主力になっている。証明はネパールの日本語学校に任せ、どこまで受講したかフォローできない。



街中ではジャングルの蔭のようにケーブルが絡み合っているが、これで電力と通信が確保され、経済の活力につながっている。これがライフラインとも言える。

ネパールが開国したのは1951年。王政から共和制に移行したのが2008年。産業基盤、社会制度など近代化の途上にある。160の人種と言われる多民族国家だが、ヒンドゥー教9割、仏教1割が共存する穏やかな国民性。インド系の会議派と中国系の共産党も、相互に協調性がある。政府は教育に注力し、今年から6334制に移行した。英語力もあるアジアからの貴重な人財が提供できる国である。語学留学生のアルバイトだけでなく、早く、ネパールからの労働力受け入れを正常化し、相互の発展に役立ててほしい。



プラカシュ・パウデル氏。今回旅行の手配とガイドをしてくれた。「日本語名」一郎。父親からはいつも「勉強をなさい」と言われてきたという。4人の仲間で設立した旅行会社は、大震災後借金して皆の出資を引き受けた。誠実で、知性があり、温和な性格だが、ガッツがある。

Site : [www.himalayanhub.com](http://www.himalayanhub.com)

Facebook : himalayanhub

保存地区でもある観光地域タメルにあるオフィスで  
日本の知人も多いため、日本との懸け橋としても期待されている。